

正法眼蔵の奥書に関する一考察

——特に「八大人覺」をめぐって——

石 島 尚 雄

一 はじめに

ここにいう「八大人覺」とは、いわゆる十二卷本『正法眼蔵』の中の『正法眼蔵第十二、八大人覺』をさす。この巻の奥書には、三種類の形が現存する。今回の論考では、この三種の奥書の検討と、古来からの解釈を含味して、筆者のこの奥書に関する考えをまとめてみようと思う。

二 十二卷本「八大人覺」について

十二卷本「八大人覺」の奥書に次の様にある。すなわち、彼本奥書曰、建長五年正月六日書永平寺今応永廿七稔孟夏上旬日、於永安精舍衣鉢閣下、拜書之、于時文安三年三月八日、能州藏見保、於藥師堂書之。之意趣者、以此良結縁、生生世世見仏聞法、出家得道、供養三宝、濟度衆生、成等正覺。永平末流小新戒比丘（永平正法眼蔵寫書大成一、八七二頁）

とある。これは、「今応永廿七稔」とあるところから、西紀一四二〇年に書寫した時に、「（彼本奥書曰）、建長五年正月六日書永平寺」という奥書があつたことが知られる。そして、當時の敬虔な宗侶から判断すると、自分勝手に改変することは考え難いから、この様なスタイルの「八大人覺」の奥書が存在していたと考えるのが妥当である。このことは、「八大人覺」の写本を考える上で、いわゆる懷奘の書いた奥書がない写本の系統が存在することが示唆されるのであり、従来この点が看過されていることを考えあわすと、まだ一考の余地がある。またいわゆる十二卷本「正法眼蔵」の中で、十二卷全部そろっているのは永光寺所藏本のみであり、しかもこの永光寺本の「八大人覺」には懷奘の書いた奥書が存在しない。すなわち、十二卷そろっている十二卷本「八大人覺」の奥書には懷奘の書いた奥書は存在していない。したがって、懷奘の書いた奥書のある「八大人覺」とは別の系統の写本として、

今後考察するうえで注意を要するのである。

三 秘蜜正法眼蔵「八大人覺」

秘蜜正法眼蔵「八大人覺」の奥書に次の様にある。すなわち、

本云、建長五年六日書于永平寺。如今建長七年乙卯解制之前日、令義演書記書寫一畢、同一校之。右本、先師最後御病中之御草也。仰以、前所撰僻字正法眼蔵等、皆書改。并新草具都盧一百卷、可撰之云云。既始草之御此卷、當第十二也、此之後、御病漸漸重増。仍御草案等事即止也。所以此御草等、先師最後ノ教勅也。我等不幸、不拜見一百卷之御草、尤所恨也。若奉戀慕先師之人、必書此十二卷、而可護持之。此釈尊最後之教勅、且先師最後之遺教也。懷契記之。(永平正法眼蔵寛大成一、九四九頁)

とある。この奥書は、その解釈をめぐって、色々と説が分かれている。この中でもっとも重要な問題を孕んでいる箇所は、「若奉戀慕先師之人、必書此十二卷、而可護持之。此釈尊最後之教勅、且先師最後之遺教也」という箇所である。すなわち、「此十二卷」が、いわゆる十二卷本全体を指すのか、この巻すなわち「正法眼蔵第十二、八大人覺」を指すのかで意見が分かれる。そこで検討してみよう。まず第一の点を見ると、「秘蜜正法眼蔵」全体の中で関連づけて考える必要がある。「秘蜜正法眼蔵」は全部で二十八巻あるとこ

ろから考えれば、「書此十二卷」の「此十二卷」は「八大人覺」の一巻を指すのでなければ、意味をなさない。また、「既始草之御此卷、當第十二也」を見てみると、「秘蜜正法眼蔵」の中では意味をもち得るが、永光寺の十二巻本の中では、屋上屋を重ねることになり、随分珍妙な奥書といわざるを得ない。これは安易に、十二巻本「八大人覺」と二十八巻本「八大人覺」を一緒にして考えた合成の誤謬を犯したからにはかならない。この点からでも懷契の奥書のある写本と、懷契の奥書のない写本は別系統の写本であることを認識する必要がある。

次に別の観点から検討しよう。古写本建徳記(天本七年「一五三八」本)に次の様にある。すなわち、

若奉戀慕先師之人、必書寫此十二卷、而可護持此釈尊最後之教勅、先師最後之遺教也、如今建長七乙卯年七月十四日、令義演書記書寫一畢、同一校、懷契記之、正本日、建長四年之暮、及建長五年之正月六日書永平寺、自、古此卷、拜見之輩感涙ナガス、住持此卷談時、拳声ナキタマウトナリ、於末代、此遺言守、宗風永扇、門派流通不可退転(諸本対校永平開山道元禪師行狀建徳記、八〇頁)

とある。これは、例の「必書寫此十二卷」の意味を知らううえで重要な手掛かりを与えるものといえよう。まず「自、古此卷、拜見之輩感涙ナガス、住持此卷談時、拳声ナキタマウ

トナリ」の部分に注目したい。ここでは、複数ではなく単数の巻を意味していることは間違いない。ではどの巻であろうか。その直前の部分をみると、次の様にある。すなわち、

建長四年、今夏^レ比^レ微疾マスマス、最後之教誨、正法眼蔵八大人覺^レ巻也、此教誨^レ仏之遺教經^レ求遺言^レ在^レ見、一者…、八者不戲論…、此^レ八大人覺之理^レ不^レ知、仏弟子^レ在^レズ被^レ仰ナリ（諸本対校永平開山道元禪師行狀建擲記七七〜七九頁）

とある。このことから考えると、「自^レ古此巻」の「此巻」は「八大人覺」の巻であることは間違いない。また、これを含めて他の古写本建擲記を見ても、「八大人覺」の巻以外の巻を想定することは不可能である。（諸本対校永平開山道元禪師行狀建擲記七七〜八〇頁参照）したがって、古写本建擲記による「必書^ニ写^レ此^{十二}巻^ニ」の意味は、「正法眼蔵第十二、八大人覺の巻を書写する」の意味に解するのが妥当であるといえる。

更にもう一つの観点から検討を加えよう。『高台寺旧記』に次の様にある。すなわち、

永平開山建長四年壬子ノ夏ノ比ヨリ微疾マシマス最後ノ教誨ハ八大人覺ナリコレ世尊最後ノ教勅開山最後ノ教勅ナリ於末代コノ遺教ヲモモラハ宗風永ク扇ヘ門風流通シテ退転スヘカラストナリ（石川良昱、舍利礼文について、印度学仏教学研究十一巻二号二）

七二〜二七六参照。拙稿、詮慧に関する資料について、曹洞宗宗学研究所紀要第一号八九頁参照）

とある。ここで注目すべきところは、「最後ノ教誨ハ八大人覺ナリコレ世尊最後ノ教勅開山最後ノ教勅ナリ於末代コノ遺教ヲモモラハ宗風永ク扇ヘ門風流通シテ退転スヘカラストナリ」という部分であろう。「建擲記」では、「住持^キ此巻談^ハ時^ハ、拳^レ声ナキタマウトナリ、於^ニ末代^ニ此遺言^ヲ守、宗風永扇、門派流通^{不^レ可^レ退転}」とあるが、この両者を比較してみると、「此巻」は、「八大人覺」の巻であることが分かる。また、それ以外の巻名を想定することは不可能である。

以上、「秘密正法眼蔵八大人覺」の巻を検討してみたのであるが、「必書^ニ此^{十二}巻^ニ」の意味は、「必ず正法眼蔵第十二、八大人覺の巻を書して」の意味に理解するのが最も妥当であるといえる。

四 その他の「八大人覺」

泰心院本正法眼蔵「八大人覺」の奥書に、次の様にある。すなわち、

建長五年正月六日書于永平寺、如今建長七年乙卯解制之前日令^ニ義演書記写^ニ畢、同一^ニ校^ニ之、右本先師最後御病中之御草也、仰以前所撰僻名正法眼蔵等皆書改、并新草具都盧一百卷撰^レ之云々、既始草之此巻、当^ニ第十二也、此之後、違例漸々為^ニ于重増、仍草

案撰集事即止于此也、所以此草藥等、先師最後之教勅也、我等不幸而不拜見一百卷之草藥、尤所恨也、若奉_レ恋慕先師之人、必書此卷_二而可_レ護持之_一、此釈尊最後之教勅、且先師最後之遺教也、懷焚滴涙記于焉、元祿三年辛未七月、三十三世鑑沙弥晃全奉_レ敬写_二斯卷_一、この写本は永平室中におさまれる三卷の中のまき、第九次にあり、いまここにうつしいるならし、元祿四壬申六月二十日、越州永平寺於_二承陽菴_一書_二写之_一、可山拜（永平正法眼藏寛書大成八、三一二頁）

とある。この奥書は見全の結集本のものである。また、「この写本は永平室中におさまれる三卷の中のまき、第九次にあり、いまここにうつしいるならし」とあるところを見ると、「秘蜜正法眼藏八大人覺」の卷を書写したものであると推定できる。そこで、「若奉_レ恋慕先師_二之人_一、必書_二此卷_一而可_レ護持之_一」のところに注目していただきたい。ここははつきりと「書_二此卷_一」と記されているのである。二十八卷本秘蜜正法眼藏から書写したと断っておきながら、「書_二此十二卷_一」ではなく、「書_二此卷_一」と記されているのである。これは、誤写であらうか。筆者は誤写だとは思わない。というのは、「三十三世鑑沙弥晃全奉_レ敬写_二斯卷_一」と書いてあるところからして、敬いの念をもって書かれているからである。であるならば何故「此十二卷」から「此卷」になったのかというに、それは、「此十二卷」の意味を「八大人覺」の卷、すな

わち、「正法眼藏第十二、八大人覺の卷」と理解したからにはかならない。したがって、既に元祿時代において、「此十二卷」を「八大人覺」であると解する立場があることが知られるのである。また、面山本「建誓記」を見ると次の様にある。すなわち、

若奉_レ恋慕先師_二之者_一必書_二此卷_一而可_レ護持_二也_一、此釈尊最後之教勅、且先師最後之遺教也（諸本対校永平開山道元禪師行狀建誓記八〇頁）

とある。これを見ると、面山も「書_二写_一此卷_一」と述べているのであり、あきらかに「八大人覺の卷を書写する」の意味にとっていることが知られる。いづれにしてもこの二つの例から「此十二卷」を「八大人覺」の意味に理解するのみにとどまらず、積極的に誤解の生じない形、すなわち「此卷」と書き改められていることが知られるのである。

五 おわりに

今回、「八大人覺」卷の奥書について考察したのであるが、ここで総括してみよう。

まず第一に、十二卷本正法眼藏「八大人覺」の卷には懷井の書いた奥書がないことがあげられる。このことから、二十八卷本秘蜜正法眼藏「八大人覺」の卷とは異なる系統に属する写本であると推定できる。したがって、十二卷本「八大人

「覚」の巻と、二十八巻本「八大人覚」の巻とを安易に合成して考察することは許されない。

第二に、二十八巻本秘蜜正法眼蔵「八大人覚」の巻の奥書を考察する場合は、当然のことながら、二十八巻本との連関に於いて考察されるべきであり、これを無視することは許されない。このことをふまえて、「若奉_レ恋慕_二慕先師_一之人、必書_二此十二巻_一、而可_レ護_二持之_一。此釈尊最後之教勅、且先師最後之遺教也」の中の「此十二巻」の意味を考えると、永光寺の十二巻本「八大人覚」に懷辨の奥書がないことから、秘蜜正法眼蔵「八大人覚」のみに付された奥書と考える必要がある。

したがって、「此十二巻」は、「此巻」すなわち、正法眼蔵第十二「八大人覚」巻と解するのが妥当である。なお、このことを傍証する資料として、明州本・瑞長本・延宝本・門子本・元文本の各種古写本「建擲記」があげられる。それらは一様に「……必書_二写此十二巻_一、……中略……自_レ古此巻_一、拜見之輩感涙ヲナガス、住持此巻……」（諸本対校永平開山道元禪師行狀建擲記八〇頁）等と記し、「此十二巻」が複数ではなく単数すなわち「八大人覚」の巻だけであることを示している。また、『高台寺旧記』も「最後ノ教誨ハ八大人覚ナリコレ世尊最後ノ教勅開山最後ノ教勅ナリ」（拙稿、詮慧に関する資料について、『曹洞宗宗学研究所紀要』第一号八九頁参照）とあり、最後の教誨は「八大人覚」の巻であることが示されている。

第三に見全結集本を見ると、「必書_二此巻_一而可_レ護_二持之_一」と記されていることから、これは明らかに「八大人覚」巻のみを意味していることが知られる。これと同様な資料は、面山本「建擲記」があげられ、「奉_レ恋慕_二慕先師_一之者必書_二写此巻_一而可_レ護_二持之_一也」（諸本対校永平開山道元禪師行狀建擲記八〇頁）と記されている。

以上、各種「八大人覚」の奥書を検討したのであるが、その結果、その奥書の中の「若奉_レ恋慕_二慕先師_一之人、必書_二此十二巻_一、而可_レ護_二持之_一」の「此十二巻」の意味は「八大人覚」の巻の意味に解するのが最も妥当であるといえる。

したがって、「……懷辨によつて「若奉_レ恋慕_二慕先師_一之人、必書_二此十二巻而可_レ護_二持之_一」と記されたように、出家の道元門下にとつてさえ最高度に重要な著述だったと考えねばならぬと思つてゐる。勿論、道元のこの著述は、十二巻という志半ばの不本意な形で……、だからこそ後学のものは余計十二巻本を大切にすべきこと……」（袴谷憲昭、本覚思想批判、三四四頁）という様な「此十二巻」を十二巻本全体の意味に解する説には賛成することができない。

△キーワード▽ 十二巻本、二十八巻本、八大人覚、此十二巻、

古写本建擲記

（曹洞宗宗学研究所所員）